

書 評

横山伊勢雄著

『宋代文人の詩と詩論』

淺 見 洋 二

大阪大學

故横山伊勢雄氏の大著『宋代文人の詩と詩論』は、主として宋代の詩と詩論に關する論考を集めたものである。かつて氏の指導を受けた大上正美氏らによって編まれた。合わせて三十五篇の論考が收められ、譯注書などを除く横山氏の主要な研究成果がほぼ網羅されている。「蘇軾の文學」、「宋代文人の詩と詩論」、「宋代詩論」、「唐詩と宋代文學」の四部に分けた構成も、氏の研究の全體像を的確に傳えるものとなっている。

これまで中國の詩と詩論に關する研究は、唐や六朝のそ

れに集中し、宋代に關する研究はどちらかと言えば少なかった。そのなかにあつて横山氏は、宋代に重點を置いて研究を行つてきた數少ない研究者の一人である。その貴重な成果が、こうしてまとめ一覽できるようになった。その意義は極めて大きい。本書が編まれ刊行されたことを、後進の一人として先ずは喜ぶたい。

横山氏の宋代文學研究に見られる最大の特色は何か。それは本書の表題「宋代文人の詩と詩論」に端的にあらわれている。すなわち「詩」と「詩論」の兩者を視野に入れて、その連關において宋代文人の營みを考察した點にある。大上氏の本書「あとがき」によれば、横山氏の研究は宋代の詩話研究から出發したという。第三部「宋代詩論」に收める『滄浪詩話』研究をはじめとする論考は、氏が出發點から一貫して取り組んだ宋代詩論研究の成果であるが、それ以外の論考にもこれら詩論研究の成果は積極的に活用されている。つまり、詩だけを考察の対象とするのではなく、詩論をも視野に入れる形で詩を考察するという姿勢が本書の論考を貫いているのである。横山氏の研究の最大の特色

であり、今日あらためて振り返るだけの價值を持つと言えよう。

詩と詩論の兩者を視野に入れた研究が行われる場合、兩者の關係はどのようなものになるだろうか。多くの場合、詩論は詩を明らかにするための通過點、あるいは手段として扱われてきたのではないだろうか。ここには、詩を詩論よりも上位に位置づける序列意識が知らず識らずのうちに働いているかもしれない。だが、やはり我々は、同じ言語表現の秩序のもとで作動していた言説として、兩者を同じ地平の上に位置づけて捉えるべきだろう。大上氏の「あとがき」には「詩人・士大夫の生の全體性」という語が見えるが、その響みにならつて言えば、詩と詩論の兩者を「詩人・士大夫の言説の全體性」という視點から把握する必要がある。そして、この姿勢こそ我々が横山氏の「詩と詩論」研究から發展的に受け繼ぐべき研究のあり方だとわたしは考えている。

本書に收められる論考が書かれてから、すでに長い時間が経過した。その間、宋代の詩と詩論に關する研究に大き

な進展があつたことは言うまでもない。したがって、横山氏が本書で論じたことがらのなかには、今日ではなかな常識と化してしまつたものや、その後の研究によつて乗り越えられたものが少なくない。しかし、だからといって本書を素通りしてしまうことには、同じ分野の研究に關わる後進の一人として心苦しいものを覺える。そこで編集部からお誘いを受けたのを幸いとして、及ばずながら本書評の筆を執るに至つた次第である。以下、本書に收められる論考のうち、重要と思われる論考を收録順に取りあげながら、感じたこと、氣づいたことを述べていきたい。後から來た者のアドバンテージを利用して、すでに故人となられた方の論をあげつらうことにはアンフェアの感なきにしもあらずであるが、横山氏の研究成果を今日において正しく受け繼ぐようと願うが故の批評である、その點に免じてご寛恕を乞いたい。

*

*

*

第Ⅰ部「蘇軾の文學」は、蘇軾に關する十二篇の論考を

収める。ここでは、詩と詩論を論じた論考のうち七篇を取りあげて私見を述べてみたい。

第一章「蘇軾の隱逸思想について——陶淵明との關係を中心として」は、蘇軾の隱逸思想について、陶淵明との關係という視點から考察を加えたものである。杭州赴任時代に陶淵明に對する蘇軾の認識が形作られ、それが黃州流謫時代に至って更に深められていったことを論じている。一般的に言つて中國の文人にとつて隱逸の思想は重要なテーマであり續けたが、蘇軾の場合もそれは例外ではなく、横山氏に限らず多くの論者がこの問題に取り組んできた。

蘇軾の隱逸思想を論ずるにあたっては、他の何にも増して蘇軾の詩のテキストが重要な資料となることは言うまでもない。本論考も蘇軾の詩を読み込む形で論が展開される。ところが、ここで氣になるのは蘇軾詩の讀解に誤りが見られることである。論旨の展開にも關わる讀み誤りなので指摘しておきたい（ここでは二つを指摘するにとどめる）。

先ず、本書二〇頁に舉げる「自金山放船至焦山」（馮應榴輯注『蘇文忠公詩合注』卷七）の「山林饑餓古亦有、無田

不退寧非貪」句について。これを横山氏は「山林に饑餓すること古にも亦た有り、田無ければ退かざるも寧ろ貪に非ず」と訓じて「本來の性を守るための隱退であるのだから、山中に餓死しては何にもならない、理想の實現のためには十分な備えが必要だ」と解されている。だが、後句については「田無ければ退かざるは寧ろ貪に非ずや」と訓じ、その意味するところは「田が無ければ歸隱しないというのは欲が深すぎる」と解すべきである。つまり、氏の言うように蘇軾は隱逸の實現のためには資産が必要だと考えていたわけではなく、むしろそれとは逆の考えを持っていたのである。

また、横山氏は黃州時代に陶淵明に對する認識が深まりを見せたことについて述べるなか、本書三〇頁に「次韻答孫侔」（『合注』卷一九）を舉げている。この詩は黃州時代以前の作であり、何故ここに舉げられているのか不明であるが、それについては措く。重要なのは冒頭の四句「十年身不到朝廷、欲伴騷人賦落英、但得低頭拜東野、不辭中路候淵明」についての理解の仕方である。氏はこの四句を

「十年 身は朝廷に到らず、騷人を伴いて落英を賦さんと欲す、但だ得たり低頭して東野を拜するを、辭さず中路にて淵明を候^{うかが}うを」と訓じて、「地方官の職にあること十年、屈原のように江南の地で憂國の詩を作ろうとしたが、我が詩は、地方の微官に在つて不平ばかりもらしていた孟郊ばかりのもの、いまからでもよい、平靜な境地を平易な詩語でもつてうたう陶淵明のような詩を作りたいものだ」という意味で解釋するが、これは誤りであらう。前の二句は、原唱の作者孫俸が主語となっており、「騷人」とは蘇軾を指す。後の二句は「但だ低頭して東野を拜するを得ば、中路にて淵明を候^{うかが}うを辭さず」と訓ずるべきであり、ここでの孟郊と陶淵明は孫俸を指している。四句全體として「孫俸は十年の歲月、朝廷とは無縁の暮らしをつづけ、いま詩人のわたしとともに詩を作ろうとしている。孟郊（孫俸）の傍にいられるならば、かの王弘のように酒を用意して陶淵明（孫俸）を引き留めたいものだ」というような意味で解すべきだらう。孫俸を陶淵明に比して述べる一句は「酒を手にあなたのもとを訪ねて語り合いたい」という

孫俸に對する親しみを込めた挨拶を述べた句であつて、これを横山氏のように「陶淵明の詩の世界そのものに沈潜し、そこに自己の詩の規範を求めるまでに到っている」と解するのは無理があるのではないだらうか。

第二章「蘇軾の『和陶詩』について」は、蘇軾の生涯と關連づけながら「和陶詩」について考察を加える。陶淵明詩の受容という觀點から蘇軾の隱逸思想を考察した第一章とも密接に關連する論考である。「和陶詩」の持つ重要な意義に着目した先驅的な論考の一つであり、その問題意識は今日なお受け繼ぐべきものとして色褪せていない。ここで横山氏は、蘇軾が陶淵明の隱逸に「何ものにも束縛されない自由な生活の中に自己の本性を充實させる生き方」（五四頁）のモデルを見出すことによって、單なる隱逸を超えた思想に到達しえたことを指摘している。氏は次の第三章の冒頭でも「蘇軾の文學の主要なモチーフは、一個の人間としてその本性を全うすること——人生充實の追求——にあった」（六五頁）と同様のことを述べており、ここに氏の基本的な蘇軾理解が凝縮されていると言えよう。

この理解の上に立つて横山氏は、「和陶詩」にあらわれた蘇軾の思想を支えているものとして「『人生は寄するが如きのみ』という人生観」を挙げ、次のように述べている。「蘇軾は有限である人間の命の営みをはかないものと感じ、人生は無窮の自然に假りの宿りを寄せる不安定な存在であると考えている。……人生を短く不安定なものと考えればこそ、その刻一刻を充實し安定したものとしようというのである」(五七頁)と。確かに蘇軾にとつて人生は「不安定なもの」として映っていただろう。だが、その人生に對して「人生は寄するが如きのみ」と言い放つとき、果たして蘇軾は人生を「不安定なもの」と考え、それを「安定したもの」に變えようとしていたのだろうか。もっと大きな、いわゆる「巨視的な態度」(横山氏も本書の各所に引く吉川幸次郎『宋詩概説』の語)に立つての言葉として理解すべきではないだろうか。

第三章「蘇軾の政治批判の詩について」は、前の二章が「隱逸」に焦點を當てるのに對して、「政治批判」に焦點を當てる。「隱逸」と「政治批判」、言うまでもなく兩者の

關係は中國の文人にとつては最大のテーマであり、蘇軾もその例外ではない。この點については横山氏も第一章において蘇軾「次韻柳子玉過絕糧二首之二」(「合注」卷六)に見える「齊物の志／濟時の心」という二項對立の圖式(「孟子」以來の「獨善／兼濟」と同じ圖式)を抽出することによつて的確に捉えている(二六頁)。前の二章で蘇軾の「齊物の志」を論じた横山氏は、本論考において「濟時の心」を論ずるのである。

ここでもやはり重要な資料として讀み込むべきは蘇軾の詩であろう。横山氏は政治批判を行った蘇軾の詩のうち、「山村五絶」(「合注」卷九)と「吳中田婦歎」(「合注」卷八)を取りあげている(六七―七〇頁)。「山村五絶」は農民の暮らしぶりをうたつた七言絶句の連作。熙寧六年、杭州通判時代の作。例えば、その第四首は「藜を杖つき飯を裹みて去ること忽忽たり、眼を過ぐる青錢 手を轉じて空し、贏ち得たり 兒童の語音好きを、一年の強半は城中に在り」と、農民たちが貸付金の授受のために街場に頻繁に出入りするようになったさまをうたう。青苗法の施行を背

景にした作品であり、後に蘇軾が朝廷を批判したとして彈劾される際の證據となつた作品であることはよく知られていよう。「山村五絶」と並んで取りあげられる「吳中田婦歎」は長篇の七言古詩、いわゆる樂府系の詩。熙寧五年、同じく杭州時代の作。「今年 粳稻 熟すること 苦だ遅し」の一句に始まり「如かず 却つて河伯（河の神）の婦と作るに」の一句に終わる、農婦の苦しみをうたつた作品であり、氏の言葉を借りれば「民情を上^にに訴え、爲政者の反省を求めるといふ傳統的な諷諭詩」（六九頁）である。

これらの詩について横山氏はあまり高い評價を與えてはいない。「山村五絶」については「正面きつて社會疲弊の狀況をえぐるものでもないし、いわゆる社會詩の系譜においても詩の藝術的完成度は高いものではない」（六八頁）と述べ、「吳中田婦歎」については「詩の發想・表現ともに社會詩としては類型的である」（七〇頁）と述べている。このように過去の文學作品を我々の價值觀で評價・裁斷してしまうことに對して、わたしは疑問を感じないわけではない。それについては措くとして、ここで横山氏はせっかく

「山村五絶」と「吳中田婦歎」の兩者を並べておきながら、ある問題を深く追求しないままに見逃してしまつてゐる。わたしにとっては極めて興味深い重要な問題だと思われるので、ここに述べておきたい。

「山村五絶」と「吳中田婦歎」とは共に社會批判を行つた作品であるが、兩者の間にはさまざまな違いがある。ここでは、ごく素朴な事實に注目してみよう。すなわち、前者が「烏臺詩案」において蘇軾彈劾の證據となつた作品であるのに對して、後者はそうではないという事實である。前者はあくまでも山村の農民の暮らしぶりをうたつた作品であり、政治批判を前面に掲げて書かれた詩ではない。それに對して後者は政治批判を前面に掲げた作品であり、「官は今 錢を求めて米を求めず」というあからさまな言葉が述べられている。にもかかわらず、前者が彈劾の對象となり、後者がそうならなかったのは何故か。これは興味深い問題ではないだろうか。

實は、この點については横山氏も少しだけ觸れており、「御史臺において問題となつたのはむしろ、「讀書萬卷不

讀律、致君堯舜知無術」(戲子由)といった詩一篇の中の數句である場合が多い」(七〇頁)と述べている。つまり、こゝ言つていいだろう。政治批判を前面に掲げて書かれた詩ではなく、蘇軾自身が意圖していたか否かに關わらず(おそらく意圖していたと思われるが)、他の主題をうたうなかに政治批判の意圖を讀み取れる詩が御史臺においてはむしろ彈劾すべき危険な作品だと見なされた、と。思うに、政治批判を前面に掲げて書かれる傳統的な諷諭詩は、權力にとつてさほど危険なものではなかったのだ。何故ならば、それは詩のありうべきジャンルとして古くから認められてきたものであり、そこに表明される政治批判は言つてみれば權力が認めた枠内での批判に過ぎなかったからである。そこに響いているのは作者自身の肉聲ではない。作者は批判者という役柄を演じているに過ぎない。ところが、「山村五絶」のような詩に響いているのは作者の肉聲であり、そこに表明されているのは作者の本心に發する政治批判である。このように讀まれ受けとめられたからこそ、彈劾の対象となつたのであらう。そうだとすれば、「社會疲弊の

狀況をえぐるものでもない」という横山氏の評價には修正が必要である。蘇軾自身の意圖をなかなば越える形で、讀み手にとつてこの詩は「狀況をえぐるもの」となつてしまつたのである。詩について論じる際には、作者と作品の關係のみを捉えるだけではなく、讀み手がそれをどのように受けとめたかという視點を加えることによって見えてくるものがあるのではないだろうか。

第四章「蘇軾の『南行集』の詩について」は、若き日の蘇軾が蘇洵・蘇轍との間で行つた唱和を集めた小集について論じたものである。ここでは『南行集』所收の詩のみならず、これに附された序文の文學論(詩論)についての考察にも多くの紙幅が割かれており、後の章、特に第八章「蘇軾と黃庭堅」に論じられる内容とも重なり合う。横山氏の蘇軾研究において重要な位置を占める論考と言えよう。本論考のうち、『南行集』所收の蘇軾の詩を主に蘇轍の詩と比較して、その特質を論じた箇所はおおむね首肯できる考察となつている。だが、文學論についての考察(八二―一三頁)には疑問を感じた箇所がないわけではない。ここで

氏は『南行集』序文の「夫れ昔の文を爲る者、能く之を爲るを工と爲すに非ず。乃ち之を爲らざる能わざるを工と爲すなり」——書こうと思つて書いた文章ではなく書かざるを得ずして書かれた文章こそが本来の文章である、という一節に注目する。文章制作における作爲を否定する考えを述べたものであり、第八章に用いられる氏のテクニカル

チームを用いて言えば「自發主義」の文學觀を語つた言葉と言えよう。この文學觀が蘇軾の文學觀の基調を形作つてゐるというのが、本論考の主眼である。この指摘は一つの卓見と言えるが、しかし氏がこれを次のような文學論と同一視していることには疑問を感じる。氏が取りあげるのは「答謝民師書」（『東坡後集』卷一四）が述べる「大略そ行雲流水の如く、初めは定質無く、但だ常に當に行くべき所に行き、常に止まらざるべからざる所に止まる」、あるいは「自評文」（『東坡題跋』卷一）が述べる「吾が文は萬斛の泉源の如く、地を擇ばずして皆な出ずべし」といった言葉であるが、これらはいずれも文章の自由な書き方、規範にとらわれない表現のあり方を水の動きに喩える形で述べたも

のであつて、書かざるを得ずして書かれた文章こそが眞の文章であると述べる『南行集』序文の文學觀とは次元を異にしていると云うべきだろう。些細な違いであるかもしれないが、蘇軾の文學論についての氏の議論の根幹に關わる論點であるため、敢えて私見を述べた。

第六章「蘇軾の詩における修辭——譬喻・擬人法・典故」は、これまでの五章が蘇軾詩の思想内容に焦點を當てた考察であつたのに對して、言語表現そのものに焦點を當てて考察したものである。横山氏の蘇軾研究のバランスのよさが、ここにも見て取れる。

横山氏は、蘇軾詩の譬喻を分析するに當たつて南宋の陳騭「文則」の譬喻分類を參照している。氏は第Ⅱ部第五章「黃庭堅詩論考」の冒頭で、自身の研究方法について「宋人の詩はまず宋人に語らせる」（一九三頁）ということ述べている。こゝもそのような方法意識の上に立つものである。同じ宋人である陳騭の譬喻論に據つて蘇軾の譬喻表現を論ずるのである。このような方法それ自體は極めて適當なものと言えるが、しかし問題は陳騭の譬喻分類がどれ

ほどの有効性を持つかである。これについて、わたしは極めて懐疑的である。何故かと言えば、陳騷の譬喩分類は分類としての體をなしていないと思われるところがあるからである。ミシェル・フーコー『言葉と物』の序文に「シナのある百科事典」の分類の奇妙なおかしさが印象深く取りあげられているが、それとも通ずる論理の階梯を無視した分類のあり方は、今日の知の體系とは相容れない。陳騷の分類方法それ自體を考察の対象とするのであればともかく（陳騷の分類法を通して中國文人の言語表現に對する見方を分析する研究は十分に組み込む價值があろう）、それを我々自身の考察に援用することには疑問を感じざるをえない。

本論考は、譬喩の他に擬人法と典故についても論じている。ここでは、典故についての考察に感じたことを述べておこう。ここで横山氏は蘇軾の典故使用を、（一）典故（二）用事（三）沿襲（四）襲句の四類に分け、（一）については「古典など先行する典籍に出處を求められる語の詩中での使用」、（二）については「語の背景に故事をもつ典故の使用」、（三）については「先人の詩句の發想や表現

を使用するもの」、（四）については「沿襲の徹底したもので、先人の詩句をそのまま詩中に用いるもの」と定義づけている（二三四頁）。しかし、實際には（一）と（二）の間に明確な境界線が引けるわけではない。（三）と（四）とを分けることはそれなりに意味があるだろうが、しかし（四）は極くわずかの例外的な事例しかない。果たして一つの類として獨立させる必要があるだろうか。私見では（一）と（二）とを合わせて「用事」、（三）と（四）とを合わせて「沿襲（襲句）」とし、全體で二つの類に分ける程度にとどめておく方が分析の枠組みとしてはより有効だと思われる。第Ⅱ部第五章で氏は黃庭堅の典故使用について論ずるが、そこでもこの四類に分ける分類方法に據っている。氏にとつては重要な分類であつたのだろうか、陳騷の譬喩分類と同様、分類としての有効性をやや欠いているのではないだろうか。

第七章「宋代の詩と詩論における「意」について——蘇軾を中心として」は、「意」という概念をめぐって考察を加えたものであり、横山氏の蘇軾研究、特に蘇軾の文學觀

に關する研究の根幹をなす論考である。中國の文學論の根本問題について真正面から考察を試みた點でも大いに注目されるものと言えよう。

本論考の第一節「宋詩は尙理か」には、横山氏の問題設定の出發點が述べられる。一言で言うならば、次のようになるだろう。これまで宋代の詩は「理」を重視する（「尙理」）と見なされてきたが、一方で「意」を重視する（「尙意」）傾向も見られる。したがって、宋人にとつての「意」概念について再検討の必要がある、と。だが、この出發點でわたしは躓いてしまった。「理」と對立する概念と言へば、普通は「情」ではないだろうか、と。實際、本節で氏が擧げる明の楊慎『升庵詩話』卷四は、唐詩と宋詩とを對比して「唐人の詩は情を主とし……宋人の詩は理を主とす」と述べている。私見では、「意」は「理」と「情」のどちらに對しても接點を持つ概念であると思われる。それだけに、本節の議論には困惑を覺えた。論の出發點となる部分だけに、より丁寧な論述が望まれるところである。

ちなみに、第一節の冒頭で氏は「詩は志を言う」と「詩は情に縁る」という中國の詩論において繰り返し唱えられた二項對立圖式についても觸れている。前者が政治や道德を重視した文學觀、後者が感情や美を重視した文學觀として、對比的な文學觀を形作ってきたことは言うまでもない（ただし、ここで私見を差し挟むならば、これまで兩者の間には違いばかりが強調されすぎた嫌いがある。「志」にせよ「情」にせよ、どちらも人の内面・精神を指し示すものである以上、「言志」と「縁情」は根本的な部分では共通する文學觀を語つたものと言えなくもないからである。實際、兩者がほぼ同様の意味で用いられ、互換可能な關係にあつたことを示す事例は古くから少なからず見られる。「意」を問題にする本論考が何故「言志」と「縁情」の二項對立に觸れているのか。この點について、横山氏の論述はやや不明瞭である。「意」と「情（縁情）」とが共通する部分を含む概念であると見なしたからであらうか。先に述べたように横山氏は「理」と「意」とを對立する關係にある概念と捉えているようだが、それを踏まえてここでは「理」が「言志」の文學觀に、

「意」が「縁情」の文學觀に對應すると見なしているのかもしれない。だが、そのように考えるのだとすれば、やはりもっと丁寧な論述があつてしかるべきだろう。

「意」という語のあらわす意味の範圍は、「理」や「情」よりも幅が廣く、一筋縄では整理しきれないところがある。本論考で横山氏は、第二節「主意と含意」、第三節「新意」、第四節「立意と用意及び命意」というふうに「意」概念を幾つかに分類して論を進めている（第四節の「立意」「用意」「命意」という分類は『詩人玉屑』卷六の分類を借りたものである）。これらの分類も、果たしてどれほどの有効性を持つのか、わたしには疑問である。先に第六章について述べたことも重なるが、分類として論理の階梯に混乱が見られるし、不必要と感じられる分類もないわけではない。蘇軾の文學論における「意」の特質を明らかにする上であまり有効な分類となつていないように感じられた。

一般的に言つて、中國の文學論について考察する場合、「意」などの概念語それだけを取り出してあれこれと考察を加えるのはあまり生産的ではないように思われる。コン

テキスト次第で特殊な意味を負うケースもあれば、極く通常の意味で用いられるケースもあり、それをひとしなみに論ずることは避けなければならない。本書全體を通して、横山氏は宋代文人が用いる語にとらわれ過ぎていて嫌がある。彼らの用いる語に寄り添いつつも、それとの間に適切な距離を確保することが不可欠であろう。そのために、どのような視點・方法が求められるのか、我々にとって重要な課題である。

第八章「蘇軾と黃庭堅——自發主義と古典主義」は、蘇軾と黃庭堅の文學論を論じたものである。ここで横山氏の言う「自發主義」とは自然な發露からなる文學を重視した蘇軾の文學觀を、「古典主義」とは博學を背景に「用事」を重視した黃庭堅の文學觀をそれぞれ指している。有り體に言うならば、天才型の蘇軾と秀才型の黃庭堅という對比を示したものと言えるだろう。

本論考の論述にはあまり大きく困惑することはなかったが、しかし一つだけ大きな疑問を感じた點がある。それは「主知主義（主知性）」という概念の扱いである。横山氏は

「主知主義」なるものを蘇軾・黃庭堅に共通する特質として論じている（一七二頁、一七四頁）。確かに、黃庭堅について氏が述べる「古典主義」には「主知主義」の色彩が色濃くあらわれている。だが、蘇軾について氏が述べる「自發主義」についてはどうか。一般的に言って「自發主義」とは「主知主義」と相容れないものではないだろうか。もちろん「主知主義」は宋代（特に北宋）の文學全體に通ずる最大の特色であり、蘇軾にも「主知主義」的な傾向を認めることは十分に可能であろう。だが、そうであるからこそ、氏には「自發主義」と「主知主義」の関係について明確に論述してはしかなかったと思う。

蘇軾と黃庭堅、兩者の間には共通點もあれば相違點もある。本論考では、蘇軾と黃庭堅の共通點と相違點がうまく整理されないままに終わってしまっているように感じられたが、これもまた我々が氏から受け繼いで取り組むべき課題であるだろう。

*

*

*

第Ⅱ部「宋代詩人の詩と詩論」には、蘇軾以外の宋代文人、歐陽脩・梅堯臣・王安石・黃庭堅・陳師道・陳與義・陸游・楊萬里・朱熹について論じた十篇の論考を収める。北宋のみならず南宋にまで及ぶ幅広い時代の文人が取りあげられており、横山氏の視野の廣さが遺憾なく發揮されている。歐陽脩・梅堯臣・王安石・蘇軾・黃庭堅・陸游といった文人については、これまでにある程度の研究が蓄積されているが、陳師道・陳與義・楊萬里についての研究は極めて少ない。その缺を早くから補うものであったという點においても、貴重な成果と言える。ここでは梅堯臣・陳師道・楊萬里について論じた三篇の論考について述べてみたい。

第二章「梅堯臣の詩論」は梅堯臣の詩と詩論について、主に陶淵明・阮籍との關わり、「平淡」の詩風といった二つの視點から考察したものである。「平淡」をめぐる考察である點は、第Ⅲ部第三章「宋詩論にみる『平淡の體』について」とも重なるものである。

ここで横山氏は梅堯臣に大きな影響を與えた先行文人と

して阮籍・陶淵明を取りあげ、梅堯臣は阮籍・陶淵明の受容を通して「平淡」の作風を切り開いたという指摘を行っている。氏は言う。「〔梅堯臣は〕深い思想を飾り過ぎぬ的確な言葉で表現しよう。そう願うのである。そしてそのような詩法を阮籍・陶淵明に學んだのである」(二六五頁)と。たいへん興味深い指摘であるが、しかし一方で疑問も感じる。陶淵明の受容が「平淡」へとつながったというのは確かにその通りであろう。しかし、阮籍についてはどうか。氏自身、阮籍については「その詩は人の誇りによつて禍いを招くことをさけて、率直な表現をとらず、曲折した表現のうちに深い内容をひそませる詩法を取った」(二六三頁)と述べているが、これは「平淡」とは全く異なる方向性を持つ詩法ではないだろうか。

第三章「陳師道の詩と詩論」は、「詩人の人生と、その作品とは不可分のものである」(三四四頁)との視點に立つて、前半に陳師道の人生と關連づけながら彼の詩の特質を考察し、後半に陳師道の詩論の特質を考察するという構成になっている。ここでは、陳師道の詩論を論じた部分に觸

發されて感じたことを述べたい。なお、氏が取りあげる陳師道の詩論はすべて『後山詩話』の言葉である(この詩話が陳師道の著であるか否かは議論のあるところであるが、氏はそれについては觸れていない)。

『後山詩話』の詩論に關して、わたしが注目したいのは「語(詞)」と「意」の二項對立圖式である。「語」とは言語の表現形式を、「意」とは表現内容を指すと理解しておいていいだろう。私見では、宋代の詩論において最も重要な問題となっていたのが、この「語」と「意」との關係をめぐる問題である。黃庭堅の唱えた「點鐵成金」「換骨奪胎」にしても、根本的には「語」と「意」との關係性をめぐる議論と言える。その種の議論が、『後山詩話』にも頻出するのである。特に、先行する詩人の表現をどのように自らの作品に活用するか、いわゆる「沿襲」をめぐる議論と連動する形で。曰く、「語は少なくして意は廣し」、「語は拙と雖も意は工なり」、「語は俚なるも意は切なり」、「語意皆な工なり」等々。「語」と「意」の關係という視點から、『後山詩話』の詩論を黃庭堅など宋代文人の詩論全體

のなかに位置づけて考察してみる必要があるのではないだろうか。

なお、本論考で横山氏は杜甫の「奇」をめぐってなされた陳師道の詩論を重視するが（三五五頁）、そうであるならば何故『後山詩話』に見える次の一節を取りあげないのだろうか。「王介甫は工なるを以てし、蘇子瞻は新なるを以てし、黃魯直は奇なるを以てするも、子美の詩は奇と常、工と易、新と陳と好からざるは莫し」。「奇」「工」「新」といった側面と「常」「易」「陳」といった側面とを兼ね備えた詩人として杜甫を高く評價した言葉であるが、これは『後山詩話』において杜甫とその「奇」がどのように捉えられていたかを考察する上で、極めて重要な発言であると思われる。

第九章「楊萬里の詩論と詩——近體詩を中心として」は、楊萬里の詩の變遷を彼の人生と関連づけながら詩論をも視野に入れて総合的に論じたものである。楊萬里は『滄浪詩話』において「誠齋體」という詩體の名を與えられてもいるように、南宋にあつては獨自のスタイルを確立した詩人

として認知されていたことが窺われるが、その割にこれまでは十分な研究がなされてこなかった。その意味でも本論考は貴重な成果である。

ただ、わたしは本論考の出だしの部分で躓いてしまった。冒頭、横山氏は楊萬里が初期の江西詩派の影響下にあつた作風から「平靜な心境」をうたう作風へと變化を遂げたことを論じている。ここで氏は「江西詩派の詩人を氣どり詩を多作していた」初期の詩として「除夕前一日、歸舟夜泊曲渦市、宿治平寺」（『誠齋集』卷二）の「市人 歌い呼びて時節を作す、詩人 兩膝 頬よりも高し」を取りあげ、「寒さを忖えて身をかがめている……苦吟の姿」だと解している（四二二頁）。だが、この詩は旅から家に歸る途中、やむを得ず宿泊した寺でのわびしい自分の姿——周圍は年の瀬を迎えて賑わっているのに、膝を抱えてしょんぼりとしている姿を淡々とした語り口でうたった詩であつて、「江西詩派」とも「苦吟」ともおそらく關係しない。また、氏は楊萬里が初期の作風から脱却したことを示す詩として「閑居初夏午睡起二絶句」其一（『誠齋集』卷三）を取りあ

げ、この詩について張浚が述べた評語「胸襟透脱」に着目する。氏は、この評語は楊萬里の「禪のあるいは道學的な心境」を指摘したものと解する（四二二頁）。だが、これは「胸中にとらわれがなくなすすきりした」というような意味であつて、「禪」や「道學」との關係を読み取るのはやや深讀みに過ぎるのではないだろうか。

本論考でも横山氏は詩話を盛んに活用する。例えば、楊萬里に獨特の詩論として「句外の意」をめぐる議論を取りあげて分析を加えたところでは「詩に句中に其の辭無きも句外に其の意有る者有り」という一節を含む『誠齋詩話』の議論を挙げながら興味深い問題を指摘している（四二六―七頁）。この部分について、わたしは何故「味外の味」をめぐる楊萬里の詩論を取りあげないのか、疑問に感じた。「味外の味」とは「習齋論語講義序」（『誠齋集』卷七七）に見える語。この他にも、楊萬里には「味」なる概念によって詩を説明する議論が少なくない。例えば、「頤庵詩稿序」（『誠齋集』卷八三）は次のように述べる。「夫れ詩は何爲る者ぞ。其の詞を尙ぶのみ。曰く、詩を善くする者は詞を去

る。然らば則ち其の意を尙ぶのみ。曰く、詩を善くする者は意を去る。然らば則ち詞を去り意を去れば則ち詩は安くに在るか……」——「詞（語）」を去り、更には「意」をも去ったところに詩の本質はあるのであつて、詩の本質のあり方は「味」のそれにも似る、と。この後で楊萬里は「茶」（茶）の味わいに喩える形で詩の本質を説明している。また、『誠齋詩話』にも「詩の已に盡きて味の方まさに永きは乃ち善の善なり」とあつて、言葉が盡きたところに生ずる「味」にこそ詩のすばらしさが存するという議論がなされている。「句外の意」に着目するのであれば、これら「味」をめぐる議論についてもぜひ觸れるべきであろう。ちなみに、楊萬里の詩論について横山氏は「江西詩派の詩法を基盤としている」（四二八頁）と概括しているが、「味」をめぐる議論は江西詩派の詩法とは異なる方向性を示すものと言えるのではないだろうか。本論考を通して氏は盛んに楊萬里における「江西體」（江西詩派の詩法）の影響を言うが、しかし肝心の「江西體」の中身が明確に押さえられていないため、わかりにくいところが多いと感じら

れた。

* * *

第三部「宋代詩論」は、宋代の詩論について論じた論考を収める。全體は五章からなり、『滄浪詩話』、そして宋代の詩論における禪の影響や「平淡の體」といった問題が論じられている。先述のように、横山氏は詩話の研究から出發したという。その意味では氏の研究の原點が示されている部分であり、それだけに力のこもった論考が並んでいる。

また、第四部「唐詩と宋代文學」は、宋代文人の詩・詩論との關連を視野に入れつつ、他の時代の文人や詩以外のジャンルについて論じた論考を収める。全體は八章からなり、唐の王維から元の倪瓚に至るまでの幅廣い時代の文人、また「話本」というジャンルまでもが取りあげられており、氏の幅廣い關心が窺われる。第三部・第四部についても我々が横山氏から受け繼ぐべきものは少なくない。今回はわたしの力不足ゆえに論評を加えることができなかったが、今後あらためて精讀を試みたいと思う。

以上、第Ⅰ部・第Ⅱ部を中心に横山伊勢雄氏の大著『宋代文人の詩と詩論』を讀んで感じたこと、氣づいたことを述べてきた。この貴重な成果をいかにして受け繼ぎ、發展させるか、與えられた課題の大きさを思うと肅然たらざるを得ない。

(創文社、二〇〇九年六月、總七七七頁)